

# 歌の絆 絶やさない

## 東京合唱団 震災追悼公演今年も

東日本大震災の追悼コンサートを毎年3月に開催し、収益金で被災地に楽器を贈っているアマチュア混声の「東京合唱団」(団員約90人)が、今年も都内で追悼コンサートを開く。「節目の5年」を迎えた昨春を最終公演にするつもりだったが、「震災を忘れないで」という被災者の声を受け、6年目の開催を決めた。公演は3月11日。団員は「復興は道半ば。歌で犠牲者の鎮魂と被災地の復興を祈りたい」と意気込む。

当初、昨年で区切り「復興は道半ば」



3月11日の追悼コンサートに向け、練習に励む塩谷さん(前列中央)ら東京合唱団のメンバー(東京都渋谷区で)

同合唱団は63年の歴史を

持ち、首都圏を中心に活動。追悼コンサートは、震災直後の2011年5月、団員で元経済企画庁事務次官の塩谷隆英さん(75)が仲間呼びかけて企画した。合唱団は定期演奏会で、様々な作曲家のレクイエム(鎮魂歌)を歌っており、塩谷さんは「自分たちも被災地に寄り添えるのでは」と考えたという。

翌年3月の初公演後、協賛金や義援金を使い、津波で被災した高齢者施設や保



岩手県釜石市の「五葉寮」では、東京合唱団から寄贈されたピアノの伴奏に合わせて、入所者らが歌をうたっている。昨年12月

育所などに楽器を贈る活動を始めた。過去5回のコンサートを通じ、岩手、宮城両県の17施設に、修理と調律を施した再生ピアノ14台やマラカス、太鼓などを届け、現地で団員有志によるミニコンサートも開催。岩手県釜石市の特別養護老人ホーム「五葉寮」で暮らす錦山淑子さん(89)は「自宅を失い、震災を思い出すとつらいが、ピアノの音に癒やされています」と話す。

塩谷さんらは当初、「公演は区切りの良い5回まで」と考えていたが、時がたつにつれ、「忘れられるのが怖い」「被災地を忘れないでほしい」という被災者の訴えを耳にすることが増えた。団員からも「このまま終わるのは寂しい」との意見が出て、今年の公演を決めた。来年以降は未定だが、岩手県一関市出身の団員、篠塚智子さん(51)は「歌を通して、古里の被災者と心を通じ合わせる活動は続けたい」と話す。

今年のコンサートは3月11日、東京都北区の「北とぴあ」で午後2時開演。一般公募の参加者を含めた約

140人で1時間以上続くベルデイの「レクイエム」に挑戦する。入場料は3500円。問い合わせは、追悼公演事務局(090・8871・7672)へ。